

竹取物語

全訳注

上坂信男



上坂信男（うえさか のぶお）

1927年生れ。1950年早稲田大学文学部(旧)卒業。日本文学専攻。現在、早稲田大学教授(文学部)。著書、『物語序説』、『古代物語の研究』、『源氏物語往還』、『伊勢物語評解』他。



講談社学術文庫

定価300円

竹取物語

上坂信男

昭和53年9月10日 第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 廣濟堂印刷株式会社

製 本 株式会社上島製本所

© Nobuo Uesaka

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0193-582690-2253(0)

(術E)

竹取物語

全訳注 上坂信男

講談社学術文庫

まえがき

物語の世紀と言ってもよいほどの平安時代の物語文芸は、いうまでもなく『源氏物語』を頂点とする。けれど、『源氏物語』が真にすぐれているのは、ある日、突然と出現したからではない。それは第一には、物語文芸の伝統を前向きな形で摂取発展を遂げたからである。

その『源氏物語』に大きな影響を与え、「物語の出で来はじめの祖」、すなわち、物語の世紀の開幕を告げた作品として称揚された『竹取物語』とはどのような作品だろうか。

『竹取物語』の性格について、これまで、多く論究されて来た結果を、日本古典全書本（南波浩著）の解説には二十一も挙げてある。

1、物のあわれを知らしめるもの。2、上流貴族の好色ぶりを諷刺した物語。3、仏教的教訓物語。4、伝奇体小説。5、王朝世態小説。6、永遠美を幻想するお伽噺。7、成人向芸術童話。8、伝奇的な童話式ロマンス。9、道教思想から出発した神仙物語。10、現世否定の浄土希求小説。11、現実否定の立場に即した天上憧憬小説。12、反伝說的、写実物語。13、常世の世界幻想の小説。14、神仙譚的恋愛小説。15、伝奇的素材の知的な取扱

いと、現実的素材の写實的な取扱いによる、浪漫的伝説世界と現実的日常生活との統一。16、永遠の感傷としてのおとぎばなし。17、一種のユーモア小説。18、古伝承をおとぎばなしとして素直に物語化したもの。19、貴族社会の伝奇的恋愛小説。20、現実的題材と伝奇的題材との相反する二つの契機の統一の世界。21、人間無力觀の文学。

『竹取物語』とは、人さまさまの読み取り方のできる作品であることが分ろう。

そこで想起するのは、シェークスピアに対する評語だったと思うが、本当に秀れた作品は何歳の人が読んでも、年齢に応じた読書の喜びを与えてくれる、ということである。少年時代に読めば筋の変化展開を辿るだけでも楽しかろうし、青年時代に読めば、人間のあるいは人生の未知の部分を学び取ることができよう。壮年時代には疲れた心に激励と蘇生を受けようし、老境にある者は懷古と慰藉を与えられよう。奥行きの深い文芸作品は、それほどまでに多様な受け取り方を許すものなのだ。

「かぐや姫」と聞けば、多くの人は幼少のころを懷かしく思い出すことだろう。だが、そのかぐや姫のお話が、前に挙げたように、種々様々な読み取りができるとは！

読者のみなさんも、ただ今のみなさんなりの「読み」を持つていただきたい。そして、年月経て後に、また「読み」を確かめて、みなさんの精神遍歴の軌跡を、みずからの手で記念していただきたい。『竹取物語』とは、そうした試みに適した、秀れた一冊の書物なのである。そして、この学術文庫本も許される範囲内で、私なりの理解のもとに、読者のみなさんの先

導をつとめるつもりである。

著者

識_{しるす}

目次

まえがき	3
凡例	10
一 今は昔、竹取の	13
二 竹取の翁 おきな 竹を取るに(一)	17
三 竹取の翁竹を取るに(二)	20
四 世界の男(一)	26
五 世界の男(二)	28
六 これを見付けて、翁	32
七 翁いはく、「思ひのごとも」(一)	39
八 翁いはく、「思ひのごとも」(二)	40
九 翁いはく、「思ひのごとも」(三)	43
二 翁いはく、「思ひのごとも」(一)	50
二 翁いはく、「思ひのごとも」(二)	51

三	車持の皇子は(一)	54
三	車持の皇子は(二)	57
四	車持の皇子は(三)	59
五	車持の皇子は(四)	62
六	車持の皇子は(五)	65
七	車持の皇子は(六)	66
八	車持の皇子は(七)	69
九	車持の皇子は(八)	72
二〇	車持の皇子は(九)	74
二	右大臣阿倍の御主人は(一)	79
三	右大臣阿倍の御主人は(二)	81
三	右大臣阿倍の御主人は(三)	84
四	右大臣阿倍の御主人は(四)	86
五	右大臣阿倍の御主人は(五)	88
六	右大臣阿倍の御主人は(六)	90
七	大伴の御行の大納言は(一)	94
八	大伴の御行の大納言は(二)	98

元	大伴 おおとも の御行 みゆき の大納言は(三)	101
三	大伴の御行の大納言は(四)	104
三	大伴の御行の大納言は(五)	107
三	大伴の御行の大納言は(六)	110
三	大伴の御行の大納言は(七)	113
三	大伴の御行の大納言は(八)	115
三	中納言 いそのかん 石上 まろ の麻呂足 なり (一)	121
三	中納言石上の麻呂足(二)	124
三	中納言石上の麻呂足(三)	126
三	中納言石上の麻呂足(四)	128
元	中納言石上の麻呂足(五)	131
四	中納言石上の麻呂足(六)	133
四	かくや姫かたちの世に似ず(一)	136
四	かくや姫かたちの世に似ず(二)	139
四	かくや姫かたちの世に似ず(三)	141
四	かくや姫かたちの世に似ず(四)	144
四	かくや姫かたちの世に似ず(五)	147

四	かくや姫かたちの世に似ず(六)	149
四	かくや姫かたちの世に似ず(七)	152
四	三年ばかりありて(一)	158
四	三年ばかりありて(二)	160
五	八月十五日ばかりの月に(一)	164
五	八月十五日ばかりの月に(二)	169
五	八月十五日ばかりの月に(三)	171
五	八月十五日ばかりの月に(四)	173
五	八月十五日ばかりの月に(五)	176
五	八月十五日ばかりの月に(六)	177
五	かかる程に、宵うち過ぎて(一)	184
五	かかる程に、宵うち過ぎて(二)	187
五	かかる程に、宵うち過ぎて(三)	190
五	かかる程に、宵うち過ぎて(四)	193
六	かかる程に、宵うち過ぎて(五)	196
六	かかる程に、宵うち過ぎて(六)	199
解	説	207

凡例

- 一、本文は、吉田幸一博士御蔵本を底本として採用し、適宜、漢字に置き換え、仮名遣いを改めた箇処には、原文通りの振仮名を、文字を補った場合は傍点（・）を、それぞれ附した。したがって、傍書を活用することで原本復原を可能にしておいた。（ ）を付した振仮名は、原本と関係なく、読者の読み易いことを考慮したものである。
- 二、現代語訳は、原文の趣意を生かして、独立しても読めるよう、意識を原則としたが、助詞・助動詞の用法に特に留意した。
- 三、語釈は、簡潔を旨とした。底本と諸本との比較的大きな異文についても語釈欄で触れた。語釈欄では不均衡なスペースを必要とする事項は〈余説〉を設けて、そこに述べた。
- 四、評・鑑賞は、内容の一段落ごとに付した。
- 五、分段の基準は、原文と現代語訳との対照の便を考慮して、比較的細分した。

竹
取
物
語

一 今は昔、竹取の……

今は昔、竹取の翁（おきな）と言ふもの有けり。野山にまじりて竹を取りつつ、万の事に使ひけり。名をばさるきのみやつことなん言ひける。その竹の中に、本光る竹なん一筋ありけり。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「我、朝毎夕毎に見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて手に入れて、家へ持ちてきぬ。妻の女に預けて養はす。うつくしき事限りなし。いと幼なれば、籠に入れて養ふ。

〈現代語訳〉

今から思えば昔のことだが、竹取の翁（おきな）という者がいた。野山に入つて竹を採つては、いろいろな事に使つていた。名をさるきの造（みやづこ）といつていた。毎日採つてゐる竹の中に、根本の方が光つてゐる竹が一本あつた。不思議に思つて、近寄つてみると、筒の中が光つてゐた。筒の中を見ると、三寸ほどの（たいへん小さい）人がほんとうに可愛い姿で、そこにいた。翁がいうのには、「私が毎朝毎晩見ている竹の中にいらつしやるので、分つた。私の子におなり

になるべき人なのだろう」と、両手で掬うようにして、家へ持って来た。妻の嫗に預けて育てさせる。可愛いことこのうえない。(翁にしても、嫗にしても、この子がどういふものだから) まったくわけが分らないので、籠に入れて育てている。

〈語釈〉

○今は昔 今から思えば昔のことだが、というような起筆のことば。解説参照。○竹取 野山に自生する竹を採取しては細工して生業としているもの。○まじる 入り込む。いっしょになる。○取りつつ 「つつ」は動作の反復を示す助詞。

○万の事 籠や箕や農事などの必需品を作る事だが、『今昔物語』には、「竹ヲ取テ、籠ヲ造テ、要ズル二人ニ与ヘテ、其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ラムガ為ニ篁ニ行キ竹ヲ切ケルニ……」と具体的に述べてある。○さるきのみやつこ 「さぬきのみやつこ」「さかきのみやつこ」など異文があるが、「讃岐の造」であろう。

○本光る竹 根本の光っている竹。二四頁余説参照。○三寸ばかりなる人 たいへん小さい人。三寸は実数ではない。○うつくし 可愛い。思わず愛情を感じてしまうような幼少者の様子を示す形容詞。○妻の女 「女」は、「をみな」の音便「をんな」、「おむな」の音便「おむな」両者に読めるが、前者は男に対する女、後者は翁に対する嫗(嫗)の意。今は後者であろう。

○いと幼なければ 従来は主語を「三寸ばかりなる人」と解しているが、翁たちとみるのが

よかろう。

〈余説〉

(一) 竹取翁がかくや姫を発見した竹が、どのような種類のものであったか。武田祐吉博士の『新解』では、本邦固有種のマダケであつて、外来種の淡竹・孟宗竹の類ではないとされているが、山田宗睦氏の『花の文化史』では、孟宗竹は十八世紀（一七三六年）に中国から鹿児島に将来されたものだから論外として、

平安朝以前ではハチクがいちばん多かつた。ハチクの筍もモウソウのよりやわらかくうまい。ハチクからは茶筍もつくられた。ハチクは「維管束が緻密で数が多く、竹稈のうちで最も細く割れる。また、表面が緻密で光沢に富んで美しい。われわれの祖先はこの特徴をとらえて茶筍に応用したのである。その生活の知恵には驚くほかはない」（室井綽『竹・笹の話』）

竹取物語の四話には、竹取の翁の歌として、

くれ竹のよよの竹とり野山にもさやはわびしきふしをのみ見む

というのがある。くれ竹は呉竹で、ハチクのことだから、ハチクは三世紀の呉から移植されたものである。

と、ハチク説を採っている。

『万葉集』にみえるタケ取については、菌芝であろうとの説もあるが、この物語の場合、